

## 児童にとっての「ねらい」をはっきり示しましょう

平成 18 年 4 月に栃木県教育委員会では学力向上研究委員会の提言として次の提言を行いました。

授業の始めに「本時のねらい」をはっきり示しましょう

一見当たり前に思えるのですが、ふだんの授業を振り返ってみると、「ねらい」ではない、単なる「なげかけ」である場合も多いようです。指導計画には目標が示されていますが、これは教師にとっての目標であり、児童に示すレベルの「ねらい」とは違います。また、理科の教科書の冒頭に示されている言葉も「ねらい」とはいえないものです。

このような「なげかけ」で始まる授業を否定するわけではありませんが、授業に臨む前に、教師が「ねらい」を絞り込んでおくことは、分かりやすい授業を実現させ、学習内容をきちんと

「ねらい」となっていない「なげかけ」の例

- ・水溶液の実験をしよう
- ・カボチャの花粉を観察しよう
- ・かがみではねかえした日光でも、あたたかくなるのだろうか
- ・水は、どのようにあたたまっていくのだろうか

と定着させるために有効なことと思われれます。また、特に理科においては、この示し方の違いで、児童の授業への取り組む意欲が大きく変わってくると思われれますので、ここで「ねらい」について考えてみましょう。

「本時のねらい」を絞り込む際には、それぞれの授業によって、三つのタイプの『ねらい』を使い分けていく必要があると思われれます。

例えば、単元の導入やまとめなどの段階で自由に試行させることをねらうのであれば、実験（活動）

をすること自体がねらいですから、「今日は磁石のおもちゃを作ろう」でもよいでしょう。これが のタイプです。しかし、実験からきまりを見いだすことがねらいであるのに のタイプの提示では、実験だけが目的と受け取られ、児童は、そこで何を学ぶのかを意識しないで、指示されるままに 1 単位時間を過ごしてしまいがちです。

また、実験観察の技能・表現の習得をねらう授業の場合は、 の評価規準的なねらいを示すことで、目的意識をもった主体的な活動になります。

しかし、観察・実験により気付かせることがメインの授業である場合に、 の「ねらい」を提示したとしたら、児童の科学的な興味・関心を奪い、単に知識・理解の深まりを求める授業になってしまいます。この場合は、 の中心発問を提示することで、児童自身が深く考える授業となることでしょう。

「ねらい」の三つのタイプ  
学習活動提示タイプ  
中心発問提示タイプ  
評価規準提示タイプ

以上のように、児童の授業への取組に焦点を当てて「ねらい」を考えてきました。理科の授業において、～の「ねらい」をうまく使い分けることで、児童の興味・関心を持続させ、児童主体の授業が展開していくと考えます。

また、このように教師が「ねらい」を使い分けていくことは、教師自身にとって本時の授業の流れを押さえたブレのない授業展開の実現に有効であり、理科が好きな児童と確かな学力を育てるためにも、大切なことであるといえるでしょう。

## 「分からないこと」を楽しめる児童を育てましょう

小学校の教師からは、「理科離れは感じていない」という声をよく聞きますが、最近の10年間で実施した複数の理科に関する意識調査では、理科が好きな児童が必ずしも科学的な思考を好むとは限らないことが分かります。

例えば、「理科の実験や観察が好きだ」と答える児童の割合は80～90%ですが、「実験を自分で工夫したり、結果をもとに考えたりすることが面白い」という児童は70%程度にとどまります。「理科の実験や観察が好きだ」という児童の割合には、「科学的に考えることが好きというよりは観察や実験が活動的なので『好きだ』と回答している児童」も含まれているととらえるべきでしょう。

仮に、「以前と同様に理科好きな児童はいる」としても、不思議な現象に興味はもてても自分から科学的に考えようとしないう児童が増えていませんか。根拠のない予想を立てる児童が多いように感じます。このことは、最近の10年間で、解答欄に何も書かない割合が急が増えてきていることと関係があるかもしれません。このほかに意識調査から分かったことは、「理科が好きだ」と答える割合は中学生になると下がる傾向があること、「理科で勉強したことが日常生活や社会に出てから役立つと思う」と答えた児童の割合が、他教科に比べて低いということなどです。

理科好きな人間にとっては、不思議な現象を見たときにわくわくして、次々と疑問や予想が湧いてきて、仮説を立てたり、知っている知識でうまく説明しようとしたりするものです。しかし、「分からないこと」を「避けたいもの」として遠ざけてしまう人にとっては、「う～ん、おもしろいとは思いますが……。だから何?」という冷めた反応となります。そんなところへ教師が問いかけても、「答えは分かっているんですよ。教えてくれればいいのに。」と、内心では思ってしまうことでしょう。理科があまり好きではない人にとって、「不思議なこと」は、楽しくないことなのかもしれません。

中教審答申でも、『知離れ』(知的好奇心をもって学習に取り組もうとしないという現象)が起きていないかという懸念が述べられており、これが理科離れを考えるとこの新しいキーワードになっています。皆さんの学校ではどうでしょうか？

そこで、次に挙げるいくつかの視点から、知的好奇心をくすぐる授業展開を一緒に考えてみましょう。